広報 留萌 1990 9 No.390

特集 減らそうごみ生かそう資源

# ◆連載 いま留萌むかし 第四十五話

## ●有島武郎のみた留萌（明治四十年）

Aug. 10（Friday）
曇

―中略―一時四十五分留萌着。蒸気船ニ引カレテ留萌河ヲ遡ルコト約一里半ニシテ上陸シ小寺ノ立テル山腹ニ至リテ概景ヲ展望ス。市街地ノ地形ハ増毛ニ比スレバ甚ダ廣濶ニ河流ノ便モ亦大ニ可ナリ。唯波涛ノ荒キ時ニ二十尺に達シ一立方尺ニ加ハル可キ厭力ハ実ニ六千斤ニ達スルガ故ニ防波堤ヲ築クニ当タッテモ二十噸ノ角石ヲ要スト云ヘリ。

戸数約二千戸ト称ス。

山ヲ下リテ再ビ引舟に乗シ港口ニ出テ警桴所ヨリ港内全般ヲ眺望シ　旅館ニ投ズ。店ハ三叉路ノ交點にアリ。伐木セラレテ草ノミ青々ト生ヒタル伏波ノ如キ連丘ヲ東方ニ望ミ庭前ニハ少女二三手毬ヲ弄ベリ。今日気候ハ烈酷ヲ極メ殆ド困憊セントス。宿ニ着シテ浴ス可キ湯ナシ。隣室ニハ色青ザメシ病者臥セリ。

これは明治四十年八月九日に留萌を訪れた有島武郎の当日の日記である。

有島といえば「カインの末裔」「生れ出る悩み」などを著わした北海道と馴染深い白樺派の文学者である。なぜ彼が留萌を訪れたのかといえば、彼の父武が時の北海道長官河島醇の道内視察に随行することになっており、それに便乗したらしい。河島長官の視察とは時の内務大臣原敬の北海道視察の随行だった。有島の父武は薩摩出身であり、河島長官と同郷、同じ大蔵官僚出身である。

有島は明治四十年四月に四年間に及ぶ海外留学から帰国したばかりで狩太町（現ニセコ町）の有島農場にあった。翌年からは東北帝国大学農科大学（現北海道大学）の英語講師をつとめており、彼の充電期間であったらしい。

日記中にある留萌での行程は原敬内務大臣の視察の艀に同乗し、留萌川を遡り、築港の請願の趣旨を留萌の有志から聞いたものと思われる。説明役にあたったのは五十嵐億太郎を中心とした人たちであった。小樽からの釧路丸に乗っていたのは日記によると原敬、河島長官、安東警視総監、広井勇東京帝国大学教授（築港の権威）、高岡氏（高岡直吉？）とある。留萌へ向かう船内でも留萌築港の話が話題に上がっていたのであろう。留萌の波の強さとそれに耐えうる防波堤の強度まで記しており、広井勇博士からの知識の授与と考えられる。

留萌での宿はこれらの人たちとは別に旧市街にあった㊂巴屋旅館に泊している。これは初代留萌郵便局の隣にあった。中村繁人の経営で風呂もない粗末な宿屋だったらしい。隣には病人が寝ており、あまり良い印象はもたなかったらしい。また、この夜は蚊と蚤に攻められて睡眠時間は僅かに二時間したとれなかった。ちなみに宿泊代は一円十銭、従業員へのチップとして一円支払っている。

次の日、朝四時半に起床し、原敬一行と合流し、留萌川を遡り、トラックに乗り換え大和田炭鉱を見て、馬車で北竜へ越えていった。

明治末期の留萌市街

平成2年9月／発行・留萌市
編集・企画　振興室
印刷・白鷗印刷株式会社